

## 『立教学院史研究』の創刊に当たって

寺崎昌男

『立教学院史研究』がここに創刊される。第一号を学院内外の方々にお届けすることができるのは、当学院史資料センターにとって大きな喜びである。

今日、すべての大学・学校で情報公開や「アカウンタビリティ」が課題とされている。情報には、現時点の情報だけでなく歴史情報も含まれる。本紀要の創刊と今後の刊行は、この現代的課題に応じる事業の一部である。

しかしそれだけにはとどまらない。学院一三〇年の歩みを実証的に確かめ、それを通じて立教の建学の精神とその後の歴史的選択の系譜を反省・確認し、さらに今後の展望を開く、という継続的事業がここに出発した。言葉を換えると、学院の歴史的アイデンティティを確認し今後の絶えざる改革を促すための信頼しうるメディアを作り出す、という新しい事業が始まったのである。地味ながら重大な責任を持つ仕事である。

もちろん、紀要刊行の効用は以上のことだけにとどまらない。

多くの大学や学校がここ二〇年あまりの間に、創立百周年あるいはそれに近い記念日を迎えた。それに伴って年史や沿革史の編纂が盛んになり、同時に、並行して研究紀要を発行する機関が国・公・私立を問わず増えている。総数は定かでないが、かなりの学校・大学が、単に年史や記念誌だけを発行するだけでなく、研究成果発表や資料紹介の舞台をしつらえている。それは決して業績づくりや回顧・顕彰のためではない。何よりも研究的基盤をもって自校の歩みを確

かめ、公的な年史を叙述する際の堅実な基盤を築きたいからである。さらに、紀要上にならば公的な年史に書けない歴史の経緯を研究仮説として発表し、内外からの冷静かつ学術的な論議に委ねることができる。時には裏面史と言われる自校史の「影」の部分も、執筆者や研究者の学問的責任を明らかにした上で発表することができる。そのことは同時に、将来正確な年史や沿革史を完成する何よりの基礎になる。

立教学院では一九九六年から二〇〇〇年にかけて『立教学院百二十五年史 資料編』五巻（うち二巻は『ウィリアムズ主教書簡集』）、図録『BRICKS AND IVY』という全三種六冊の沿革史が刊行された。その間大いに進んだ資料調査と収集作業とを基礎として、当立教学院史資料センターが設立された。本研究紀要は、当センターが外部に向けて発信する最初のメディアに当たる。

さらに一つのことをつけ加えたい。資料センターは、資料の収集と活用にあたる「文書館」であるだけでなく、そこで新しい研究者が育つてゆく「苗床」の一つにもなることが期待される。この『立教学院史研究』という舞台への論文発表や資料紹介、意見交流などを通じて学院における若い研究者の芽が育つて行くならば、発表者にとっても学院にとってもこれ以上の幸せはない。

本第一号には、「戦時下の立教学院」に関する研究論文を教編掲載することができた。今年度センターが掲げてきたプロジェクト研究の成果を反映した一特集である。同時に、数年前の沿革史類編纂当時にはなお研究が十分に行き届かなかった、いわば未拓のテーマの一つである。

この試みを手始めにして、今後この紀要を媒体に、立教学院のためだけでなく、日本の近代大学史、キリスト教史、教育史、政治史など多くの分野に貢献することができると思えば、喜びはさらに大きいものとなる。

（二〇〇三年二月、『立教学院史研究』編集委員長）